○「**行動しない良心は悪の味方です**」(**金大中**)。黙っていることは、結局は認めてしまうことです。ささやかでも「**九条の会**」などで声を出し続けたいものです。

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 **No.143**
2010(平成22)年 8月15日(日)発行

<天皇の「聖断」でポツダム宣言を受諾、15日正午「玉音放送」で終戦を伝えた>

ポツダム会談

●ポツダム宣言は正しくは「米・英・中三国宣言」という。●ドイツのベルリン郊外のポツダムで、トルーマン・チャーチル(のちアトリー)・スターリンが、欧州の戦後処理と対日戦終結方策を討議。●7月26日、米英中三国の名で日本に降伏を勧告。終戦の条件として、日本軍国主義の絶滅、領土制限、民主化促進などを列挙。(このポツダム宣言勧告を無視したため原爆が投下された、という説もある)●日本政府はようやく8月14日にこれを受諾して無条件降伏し、翌15日正午に「玉音放送」へ。

終戦記念日特集その②

「戦争と平和・憲法9条・終戦記念日への思い」の原稿を募集し数点の寄稿がありました。特集①②③のとおりですが、さらにご寄稿をお待ちしております。

十歳と六歳の記憶

若松丈太郎

どのような知らせを受けたかについての記憶はないが、母とわたしはラジオのまえに座った。聞いた場所は自宅居間。**ラジオは茶箪笥のうえに置かれていた。**父は徴兵されて、不在。妹たちがどうしていたのかは不明。放送が終わると、母は即座に「戦争が終わった」と言った。

わたしにとっての〈ことば〉は、それだけである。

一九四五年八月十五日正午すぎ、戸外は晴天。日光がまぶしかった。四年まえの十二月八日、同じようにラジオを聞いたことの記憶がそのときとつぜんわたしに戻ってきた。四年まえ、どこでどんなふうに開戦の臨時ニュースを聞いたのかを思いだしたのである。

一九四一年十二月七日、本家と呼んでいた伯父の家で祖父母たちの部屋にわたしは泊まったらしい。八日朝の臨時ニュースは祖父母たちの客間兼居間のラジオで聞いた。**ラジオは茶箪笥のうえに置かれていた。**天候は晴れ。夜半に降雪があったらしく、日光が庭の新雪に乱反射して、室内にいてもまぶしかった。

四年のあいだ意識の底で眠っていた記憶をよみがえらせたものはなんだろうと、このことを思いだすたびに、思う。開戦と敗戦、ラジオ、まぶしさのどれなのか、あるいはそれらの複合したはたらきによるのか。それともまったくべつの作用がはたらいたのか。記憶とその復活の不思議さをいつも思う。その記憶の保存期限満了もそう遠いことではない。

わたしの敗戦記念日は教科書に墨を塗った日だ。

(原町区栄町)

玉音放送の意味は皆分からなかった

終戦の時は小学六年生で、玉音放送は家のラジオで聞いた。でも一緒に聞いた大人たちも何を言っているのか分からなかったが、しばらくして「戦争に負けた」と言っていた。

戦争の混乱で、私は現在の原町高校の前身の相馬工業学校で入学、戦後すぐに相馬商業学校に変わり、卒業の時は原町高等学校だった。原高の講堂には空襲された原町紡織工場の製品が天井までびっしり貯蔵されていたことを覚えています。**(原町区本町Kさん77歳)**

(▲東京書籍『図説日本史』よりコピー)

「玉音(ぎょくおん)放送」を聞く人々　国民に対してポツダム宣言受諾の決定は、1945年8月15日正午、「玉音放送」という天皇の肉声によって告げられた。だが、それまで正しい情報から隔離されていた国民のなかには、日本降伏の事態を理解できない者も少なくなかった。

先生から「戦争は終わった」と

終戦の時は小学二年生で、八月九、十日の空襲で大甕の家の前に一トン爆弾が落ち、私は防空壕に入っていて無事でした。

八月十五日、ラジオの放送は聞いていません。あとで大甕小学校の校庭で先生から「戦争は終わった」と教えられたような気がします。

(原町区大町Sさん　72歳)

○8月15日、全国戦没者追悼式で菅直人首相は「**悲惨な戦争の教訓を語り継いでいかなければならない**」と。しかし、8月6日ヒロシマでの記者会見で『**核抑止力は必要**』との発言。「何たる発言だ。米国の核の傘に頼っていて、一方で口先だけの核廃絶を唱えても全く説得力はない」という批判も強いようです。

思えば、あの日
ー原町高校校歌に寄せてー

早坂吉彦

思えば　あの日
戦争で死ぬ恐怖から解き放たれ
けれども　明日から
どうして生きて行けばいいか
日本中が途方にくれ――やがて
人それぞれの才覚で
どんなことをやってでも
明日までは生きよう　そういう
世の中になった。

磯つとう　うまし国はら
いざともに　我ら興さん

憶えば　この時
軍なんか二度と御免蒙る
これからはどんなことがあっても
争いを促す声には　もう
耳を傾けまい　たとえそれが
国家の命令であっても
そういう思いが
みんなにあった。

とこしえに　平和のしるし
かくてこそ　我ら結ばん

想えば　その頃
小川町にあった旧い学び舎には
生まれたばかりの原町高校校歌が
誇りかに流れていた
玄関の脇に立っていた
あの若々しい金木犀にも
聞こえていたにちがいない。

うちひびく　自由の鐘に
こぞり立つ　我が学び舎

三十数年も前
大木戸の新しい校舎に
移植された金木犀は　今
みどりの大鐘となって
どっしり据えられている
秘かに念う
六月の風に柔らかく波立つ
大鐘の紋様から　無限の
自由と希望が湧き上がり
世界中に鳴りひびき　また
木魂のようにこの地に返ってくる
ことを。

いざ我ら　ともに歌わん
とこしえに　平和の歌を

○県立原町高校校歌は、終戦から三年目の昭和二十三年に作られ、六十二年間一語の変更もなく、ずっと歌い継がれています。○作詞者は当時教員だった多田利男さん〈写真〉で、作詞の意図を、「(戦争の反省を踏まえ)これからの民主学園の進むべき道を明らかに示した。郷土の自然を採り入れた」と話していました。○そして今回、原高旧職員の早坂さん(本会事務局)が「終戦記念日に、原高校歌はまさに平和の歌であることを再認識したい」と、この詩を創作し、寄稿されました。

原町高等学校校歌

多田利男作詞
古関裕而作曲

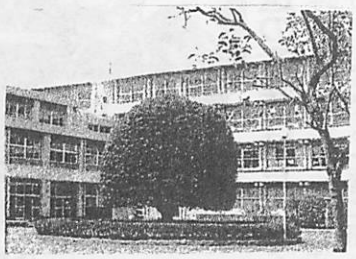
一
ひんがしの　あけゆく海に
おおいなる　力みなぎる
渋佐浜　波白くして
磯つとう　うまし国はら
いざともに　我ら興さん

二
阿武隈の　山なみはるか
いにしえの　伝えもゆかし
国見山　雲たなびきて
とこしえに　平和のしるし
かくてこそ　我ら結ばん

三
ひろき野の　みどりのなかに
ゆたかなる　土をやしない
新田川　水清くして
日に月に　流れやすまず
かくてこそ　我ら学ばん

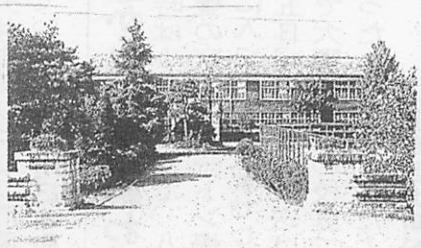
四
うちひびく　自由の鐘に
こぞり立つ　わが学び舎
日の光　真かざして
うつし世の　あらしにまけず
いざともに　我ら励まん

(昭和25年9月10日発行
多田利男著『詩集東北の春』より)



▲現在の原高の金木犀。移植後見事な大樹に成長し原高のシンボルに。

▲小川町校舎時代、玄関脇にあった金木犀。現在の原高に移植された。



▲昭和30年頃の原高。現在の小川町、サンライフ南相馬のところにありました。

○作曲は多田さんの友人の古関裕而さんに依頼。甲子園の歌『栄冠は君に輝く』と同年の作曲ですから、曲想も明るく軽快で、よく似ています。○多田さんは昭和57年11月26日に亡くなりますが、その9ヶ月前、「原高を訪ね、生徒の歌いぶりを聞いてみたい。またいつか夏の甲子園野球大会で原高校歌を聞かせてくれることを希望している」と述べていました。それもこれもすべては、平和であることが前提です。